

博士學位論文要約

論文題目： 日本における高齢者に対するエイジズムの変遷
—映画にみられるステレオタイプの分析から—
氏名： 朴 蕙彬

要約：

本研究は、高齢者についての認識である高齢者ステレオタイプの分析からエイジズムの特徴を明らかにしたものである。

第1章では、これまで日本でエイジズムがいかに研究され、その成果と到達点、残された研究課題にはどのようなものがあるのかを明らかにした。日本のエイジズム研究の到達点として、多様な個人がもつエイジズム意識に関する基礎データが蓄積されていることがわかった。しかし、個人のエイジズム意識・知識の調査・分析研究以外の方法による研究が乏しい点、研究課題として指摘されている「社会の高齢者観研究」「メディアによる高齢者の取り上げ方の見直し」の研究が行われてこなかったことが不十分な点である。これらの先行研究レビューから、エイジズム研究において社会文化における高齢者像の分析を本研究の研究課題とした。

第2章では、ステレオタイプの役割・機能を明らかにし、社会文化における高齢者ステレオタイプを解明できる素材と研究方法を探索した。ステレオタイプはエイジズムの出発点であり、高齢者の個別性を尊重せず集団として高齢者がもつ一部の特徴やイメージを固着化してしまう恐れがある。本研究では研究の素材として映画を取り上げるが、その理由は、第一に、映画が社会と文化から影響を受け、他方でその社会や文化に影響を及ぼすため、第二に、映画の国籍、年齢、性別などを越えた影響力と映画の普及方法が多様になったことによる接近性が向上したため、第三に、ステレオタイプ研究において映画は研究素材として取り扱いやすく、音声・映像のデータが同時に得られるためである。

映画の分析視点は、①ステレオタイプの時代による変遷の確認、②言語的側面と非言語的側面からの分析、③ジェンダーによる違いの確認、④分析結果を量的データとして活用、⑤ステレオタイプの類型化からエイジズムの特徴分析である。

上記のことをふまえて、高齢化社会（人口高齢化7%）以降の日本で上映された実写映画のなかの高齢者ステレオタイプを分析した。具体的には、多くの人から人気を得た興行収入上位の映画42作品、高齢者が主役の映画39作品の分析、映画『東京物語』（1953）とそのリメイク作である映画『東京家族』（2013）の比較分析を行った。

第3章の興行収入上位の映画分析から、高齢者はすべてわき役であり、主人公の家族として登場することが多くみられた。また、高齢者は感情的な行動をする存在として登場しており、老いや高齢者をめぐる否定的な言語表現が多いことが確認された。そのほかには、高齢者の登場する場面が家庭内から家庭外へ移ってきたこと、男性は長老のような役割、女性は感情の共感や悠々自適とした生活をする存在として表現されていることがわかった。

また、第4章の高齢者が主役の映画分析からは、高齢者は他人にやさしく接し助ける存在、死に近い存在として表現されていること、高齢者は認知症になるという決めつけが確認できた。さらに、他の世代は老いについて否定的なことを語る一方で、高齢者自身は否定的なことを語りつつもエイジズムへの反証ともいえる新たな発見についても語っている違いがみられた。ジェンダーによる違いについては、男性は新しいことの企画・行動をするが、自分の生活状況についてはなげく一方で、女性は認知症患者として登場する人物数が男性の倍以上多くみられた。

さらに、第5章では、代表的な高齢者ステレオタイプとして、持続的にみられる「高齢者は他人を助ける存在である」、時代の変化がみられる「高齢者の活動・生活にかかわりのある場面や人間関係が家庭内から家庭外へ拡大」を取り上げた。また、ジェンダーによる違いとして「男性はアドバイスをするが自分の状況を嘆く一方で女性は感情的な共感する余裕のある存在」を取り上げて、60年の時間差がある映画『東京物語』と『東京家族』の比較分析をと通してこれら的高齢者ステレオタイプを再確認した。

第6章では、計83作品の映画分析から、①限定的な高齢者の人間関係、②自立・支援するように求められる高齢者、③病弱な高齢者、④人間的欲求を超越した存在として的高齢者、⑤否定的に捉えられる老いという5つの高齢者ステレオタイプを確認した。これら的高齢者ステレオタイプは持続的にみられる一方で変化も確認することができた。また、これらの内容を踏まえた日本のエイジズムの特徴を以下の3点にまとめた。

第一に、老いが否定的にとらえられており、中でも男性のみに向けられるエイジズムが確認された。老いを否定的にとらえる典型的なエイジズムが確認されるなかで、従来のエイジズム研究ではあまり注目されてこなかった男性高齢者の性格特徴（がんこ）に関するステレオタイプが確認された。このことは、葛藤や問題の原因を高齢者に求めるようなものとして作用することが考えられる。

第二に、高齢者は身体的な限界を超越した存在として認識されていた。高齢者の弱さに注目する一方で、彼らの自立と支援を求めるという矛盾したものが存在する。さらに、人間の欲求を超越した存在であることが理想であるとされていることがいえよう。

第三に、高齢者は慣れ親しんだものを好み、人間関係の範囲が狭いとされていた。高齢者の人間関係は長い付き合いのある人物や家族を中心としたものとしており、高齢者の社会活動の範囲を狭くとらえているものである。さらに、新しい人間関係においては葛藤が生じることから、高齢者は新しいことよりは慣れ親しんだものを好むという決めつけが確認できた。

本研究の意義は以下の3点である。第一に、本研究は既存研究の課題として指摘されてきた社会文化における高齢者ステレオタイプを明らかにしたことによって、エイジズム研究の素材範囲を個人から社会文化へ広げた。第二に、特定時点の分析ではなく長期間のデータを分析したことによって、個別時期の分析という意味の「点の研究」から、継続する長期間の分析という意味の「線の研究」を可能にさせた。第三に、エイジズムが固定されたものでありながらも時代変化に伴う変遷があることが確認でき、克服が可能な問題であることを提示した。